

聖書に登場する人物の中でもっとも人間らしい人物は、やはりペトロでしょう。彼の魅力は良い意味でも悪い意味でも、実に人間臭いというところにあります。弟子として召命を受けたときは、漁師の仕事をさっさと捨ててすぐさまイエスに従っています。潔きよい行動派です。イエスに全身全霊で傾注していく熱心さの点では他の弟子たちよりも何枚も上手ですが、しかし、熱心であるからこそ、そそっかしいのです。ですから、しばしば主イエスの御心を理解しそこなってしまうのです。最後の晩餐の夜に「自分だけは裏切らない」と誓っておきながら、たちまちのうちに「そんな男は知らない」と断言してしまうペトロ。そうした自身のためさ加減に嫌気がさして、ぼろぼろと涙を流すペトロ。そして、復活の朝、主の再度の招きと委託に奮い立つペトロ。そのどれをとっても人間臭いペトロの姿がペトロ像として私たちの内面に焼き付いているのです。そして、初代教会の時代には、ユダヤ人キリスト者に遠慮して、異邦人との交わりの食事の場から引き下がったことをパウロから非難されてしまうペトロを私たちは知っています。ですから、ペトロという人物は、洗礼を受け、イエスに従っていくことを誓いながら、しばしば道を誤ってしまう私たち信仰者の実像そのものを投影していると受け止めることもできます。しかし、そんなダメ人間であるペトロが、カトリックでは初代の教皇とみなされているのです。

このダメ人間ペトロが主の受難予告の場面でも、中心的な役割を果たすのです。本日のテキストの前半部分でペトロは主イエスから『あなたは幸いだ。…わたしはあなたに天の国の鍵を授ける』（17節、19節）とまで最大級に激賞されます。それは『あなたはメシア、生ける神の子です』（16節）という信仰告白をしたからです。ところが、後半になると、一転して『サタン、引き下がれ』（23節）という最悪の叱責を浴びます。それほど主の受難予告はそれまでのペトロのイエス像の予測を超えた信じがたい出来事だったので。池袋西教会という教団の教会があります。現在は、池袋の文教地区に建っていますが、以前は池袋駅近くの繁華街に教会がありました。この教会のすぐ前に『サタン』という名前のスナックがあったことを古い教会員の方からお聞きしたことがあります。おそらく、教会が近くにあったので、意識的に店の経営者はサタンという名前を付けたのでしょう。ある意味迷惑な話です。たとえば、ヨブ記1章に登場する悪魔は、神に向かって『利益もないのに、（人は）神を敬うでしょうか』（1章9節）と問うています。教会近くにあるサタンという店名は話のネタとしては面白いと考えたのでしょうか。

ペトロは、16節で「あなたはメシア、生ける神の子です」と立派な信仰告白をしたのですが、その舌の根も乾かないうちに、イエスが十字架上で殺されることを話すと、自分の思惑、予測がはずれそうになったために、イエスをいさめたのです。22節の「いさめる」という言葉は実は非常に強い叱責を意味する言葉で、イエスが受難を選ぶ生き方自体を非難する言葉だったのです。それでイエスからペトロはサタン呼ばわりされてしまうのです。なぜ、ペトロはサタン呼ばわりされたのか。弟子たちの中でサタン呼ばわりされた男は彼以外にいません。たとえば「湖の上を歩く」奇跡においてもペトロはイエスに完全に信頼を寄せることができずに水の上を歩くことに怖気づいてしまい、信仰の薄い者と言われています（14章28〜33節）。「フアリサイ派とサドカイ派の人々のパン種」に対するイエスの警告でも、弟子たちは分かっているのに、信仰の薄い者たちよと言われています（16章5〜12節）。このように奇跡的な力を發揮するイエスが「誰なのか」という問いに対して、弟子たちの無理解が繰り返し福音書の読者には提示されているのです。これに対してペトロが「あなたは

キリストです」と告白するのですが、しかし、それはイエスが自ら受難と復活を予告することへの理解を含んでいない信仰告白なのです。ペトロがイエスの受難予告の言葉を聞いて、「いさめて」しまうのは、自分が思い描く輝かしいイエス像とは違うからです。このあと、エルサレムに到着するまでイエスはさらに2度自ら受難と復活を予告する(17章22〜23節、20章17〜19節)のですが、いずれも弟子たちは無理解のままです。弟子たちは非常に悲しんだり、ゼベダイの子の母はイエスが王座に就いたときに左右に息子を座らせてくれるように願ったりします。これに対して、イエスが「皆に仕える者にな」(20章26節)るよう戒められています。

イエスが自ら「神の子」「キリスト」「人の子」であることを承認するのは、エルサレムの最高法院における大祭司の尋問の場面です(26章57〜68節)が、ペトロはその直後にイエスを否認してしまうのです(26章69〜75節)。そして、『本当に、この人は神の子だった』と告白するのは、イエスの十字架刑死を指揮したローマの百人隊長たちであり(27章54節)、イエスに従ってきたのは十二弟子たちではない無名の女性たちであったのです(同55〜56節)。このように見てくると、イエスという存在が誰なのかという問題は、ペトロのキリスト告白によって一応の答えは得られたのですが、そのイエス・キリストは十字架と復活への道を歩む「人の子」であり、これと異なる道を歩むならば、イエスの真の弟子ではありえないことが強く示されているのです。

16章23節によると、ペトロは『サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている』と叱責されていますが、これは後のペトロの権威化が進んでいくことを勘案すると、イエスによってペトロの信仰告白が拒否され、しかも彼がサタン呼びわりされる伝承が生き残っていくことは、ある意味で驚くべきことなのです。事実、ルカ福音書の並行記事ではサタン呼びわりされる記事が完全に削除されています。そして、ここでのキー概念は「神のことを思わず、人間のことを思っている」ような信仰者は、たとえ「キリスト告白」をしたとしても、イエスの十字架の道を共に歩まない限りはサタン呼びわりされてしまうという強いメッセージなのです。キリスト告白する者はイエス・キリストの受難と復活への視点を欠いたままでは意味をなさないということなのです。だから、16章24節以下で『わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る』という言葉がイエスの口から語られるのです。

さて、イエスがキリストメシア(救い主)と告白されたことと、イエス自身がそれを追認したかどうかは別問題です。イエスはメシア称号が当時意味していたユダヤ民族主義的・政治的メシア期待を明確に批判していました(マタイ22章41〜46節)。けれども弟子たちは違ったのです。彼らはイエスがローマによる異民族支配を終わらせ、イスラエルの民を覇者とする神政政治を地上に打ち建てる希望を抱いていたからです。だから弟子たちはその際には自分たちにとどのような名誉ある役割が与えられるかを期待していたのです(20章20〜21節)。つまり、私たちは一般に、ペトロの信仰告白を立派なものとして理解していますが、それは受難の死を引き受けるメシアを信仰告白しなければならず、弟子もイエスと同じように受難の死を迎えることを、自分の信仰に受肉させなければならないことを示しているのです。この場合の受難の死とは、ペトロのように信仰告白をしても数時間後には否認してしまう弱さをもった人間としての自己理解を持つていることからスタートすることです。自分に危険が迫ってしまうと呪いまで口にしてしまう自分の人間的な弱さをしっかりと認識していることが大切なのです。自分が抱える弱さに向き合いつつ、弱さの中にある人間を受け入れてくださるイエスに対する信頼をもって人生を歩んでいくことが大切なのです。